

かのように

森鷗外

青空文庫

朝小間使の雪が火鉢ひばちに火を入れに来た時、奥さんが不安らしい顔をして、「秀磨ひでまるの部屋にはゆうべも又電気が附いていたね」と云った。

「おや。さようでございましたか。先さつき瓦斯ガス暖炉だんろに火を附けにまいりました時は、明りはお消しになって、お床の中で煙草たばこを召し上がっていらつしやいました。」

雪はこの返事をしながら、戸を開けて自分が這入はいった時、大きい葉巻の火が、暗い部屋の、しんとしている中で、ぼうつと明るくなっては、又微かすかになつていた事を思い出して、折々あることではあるが、今朝もはつと思つて、「おや」と口に出そうであつ

たのを呑み込んだ、その瞬間の事を思い浮べていた。

「そうかい」と云つて、奥さんは雪が火を活けて、大きい杵火鉢の中の、真つ白い灰を綺麗に、盛り上げたようにして置いて、起つて行くのを、やはり不安な顔をして、見送つていた。邸では瓦斯が勝手にまで使つてあるのに、奥さんは逆上せると云つて、炭火に当つているのである。

電燈は邸ではどの寝間にも夜どおし附いている。しかし秀麿は寝る時必ず消して寝る習慣を持つていたので、それが附いていれば、又徹夜して本を読んでいたと云うことが分かる。それで奥さんは手水に起きる度に、廊下から見て、秀麿のいる洋室の窓の隙から、火の光の漏れるのを気にしているのである。

秀麿は学習院から文科大学に這入つて、歴史科で立派に卒業した。卒業論文には、国史は自分が畢生ひっせいの事業として研究する積りいやしでいるのだから、苛くも筆つを著けたくないと云つて、古代印度インド史の中から、「迦膩色迦王かにしかおうと仏ぶつ典てん結けつ集じゅう」と云う題を選んだ。これは阿輸迦王あそかおうの事はこれまで問題になつていて、この王の事がまだ研究してなかつたからである。しかしこれまで特別にそう云う方面の研究をしていたのでないから、秀麿は一步一步非常な困難どうちやくに撞つ著して、どうしてもこれはサンスクリットをまるで知

らないでは、正確な判断は下されないと考えて、急に高楠博士の所へ駈け附けて、梵語研究の手ほどきをして貰った。しかしこう云う学問はなかなか急拵えに出来る筈のものでないから、少しずつ分かつて来れば来る程、困難を増すばかりであった。それでも屈せず、選んだ問題だけは、どうにかこうにか解決を附けた。自分ではひどく不満足に思っているが、率直な、一切の修飾を却けた秀麿の記述は、これまでの卒業論文には余り類がないと云うことであった。

丁度この卒業論文問題の起った頃からである。秀麿は別に病気はないのに、元気がなくなつて、顔色が蒼く、目が異様に赫いて、これまでも多く人に交際をしない男が、一層社交に遠ざかつて来

た。五条家では、奥さんを始として、ひどく心配して、医者に見せようとしたが、「わたくしは病気なんぞはありません」と云つて、どうしても聴かない。奥さんは内証ないしようで青山博士が来た時尋ねてみた。青山博士は意外な事を問われたと云うような顔をしてくこう云つた。

「秀磨さんですか。診察しなくちや、なんとも云われませんね。ふん。そうですか。病気はないから、医者には見せないと云うのでしたつけ。そうかも知れません。わたくしなんぞは学生を大勢見ているのですが、少し物の出来る奴が卒業する前後には、皆あんな顔をしていますよ。毎年卒業式の時、側そばで見えていますがお時計を頂戴ちようだいしに出て来る優等生は、大抵秀磨さんのような顔

をしていて、卒倒でもしなければ好いと思う位です。も少しで神經衰弱になると云うところで、ならず済んでいるのです。卒業さえしてしまえば直ります。」

奥さんもなる程そうかと思つて、強しいて心配を押さえ附けて、今に直るだろう、今に直るだろうと、自分で自分に暗示を与えるように努めていた。秀麿が目の前にいない時は、青山博士の言つた事を、一句一句繰り返して味つてみて、「なる程そうだ、なんの秀麿に病気があるものか、大丈夫だ、今に直る」と思つてみる。そこへ秀麿が蒼い顔をして出て来て、何か上うわの空そらで言つて、跡は黙り込んでしまう。こつちから何か話し掛けると、実みの入いっていないような、責せめを塞ふさぐような返事を、詞ことばの調子だけ優しくしてす

る。なんだか、こつちの詞は、子供が銅像に吹矢を射掛けたように、皮膚から弾き戻されてしまうような心持がする。それを見ると、切角青山博士の詞を基礎にして築き上げた楼閣ろうかくが、覚束おぼつかなくぐらついで来るので、奥さんは又心配をし出すのであった。

秀磨は卒業後直ただちに洋行した。秀磨と大した点数の懸隔もなく、優等生として銀時計を頂戴した同科の新学士は、文部省から派遣せられる筈なのに、現にヨオロッパにいる一人が帰らなくては、経費が出ないので、それを待っているうちに、秀磨の方は当主の

五条子爵が先へ立たせてしまった。子爵は財政が割合に豊かなので、嫡子ちやくしに外国で学生並の生活をさせる位の事には、さ程困難を感じないからである。

洋行すると云うことになってから、余程元氣附いて来た秀磨が、途中からよこした手紙も、ベルリンに著ついてからのものも、総すべての周囲の物に興味を持っていて書いたものらしく見えた。印度インドの港で魚うおのように波の底に潜くぐって、銀錢を拾う黒ん坊の子供の事や、ポルトセエドで上陸して見たと云う、ステレオチイプな笑顔の女芸人が種々の樂器を奏する國際的団体の事や、マルセイユで始めて西洋の町を散歩して、嘘と云うものを衝つかぬ店で、掛値と云うものがない品物を買って、それを持って帰ろうとして、紳士がそんな

物をぶら下げてお歩きにならなくても、こちらからお宿へ届けると云われ、頼んで置いて帰ってみると、品物が先へ届いていた事や、それからパリイに滞在していて、或る同族の若殿に案内せられてオペラを見に行つた時、フォアイエで立派な貴夫人が来て何か云うと、若殿がつっけんどんに、わたし共はフランス語は話しませんと云つて置いて、自分が呆れた顔あきをしたのを見て女に聞えたかと思う程大きい声をして、「Tout 《ツウ》 ce 《シヨ》 qui 《キイ》 brille 《ブリユ》, n'est 《ネト》 pas or」パアゾオルと云つたのじ、始めてなる程と悟つた事や、それからベルリンに著いた当時の印象をそそしい瑣細な事まで書いてあつて、子爵夫婦を面白がらせた。子爵は奥さんに三省堂の世界地図を一枚買って渡して、電報や手紙が来

る度に、鉛筆で点を打ったり線を引いたりして、秀麿はここに著いたのだ、ここを通っているのだと言つて聞かせた。

ヨオロツパではベルリンに三年いた。その三年目がエエリヒ・シユミツト総長もとの下に、大学の三百年祭をする年に当つたので、秀麿も鍰つばの嵌はまつた松明たいまつを手てに持つて、松明行列の仲間なかまに這入つて、ベルリンの町を練つて歩いた。大学だいがくにいる間、秀麿はこの期きにはこれこれの講義を聴くと云うことを、精くわしく子爵しきやくの所へ知らせてよこしたが、その中にはイタリア復興時代ふきんじだいだとか、宗教革新しんげんの起原きげんだとか云うような、歴史その物の講義と、史的研究しけんきゅうの原理と云うような、抽象的な史学の講義とがあるかと思うと、民族心理学しんしゆくやら神話成立しんわせいりつやらがある。プラグマチスムスの哲学史上しりょうの

地位と云うのがある。或る助教授の受け持っているフリードリヒ・ヘツベルと云う文芸史方面のものがある。ずっと飛び離れて、神学科の寺院史や教義史がある。学期ごとにこんな風で、専門の学問に手を出した事のない子爵には、どんな物だか見当の附かぬ学科さえあるが、とにかく随分雑ざつぱく駁な学問のしようをしているらしいと云う事だけは判断が出来た。しかし子爵はそれを苦にもしない。息子を大学に入れたり、洋行をさせたりしたのは、何も専門の職業がさせたいからの事ではない。追って家督相続をさせた後に、恐多いが皇室の藩はんべい屏になつて、身分相応な働きをして行くのに、基礎になる見識があつてくれれば好い。その為ために普通教育より一段上の教育を受けさせて置こうとした。だから本人

の気の向く学科を、勝手に選んでさせて置いて好いと思つていたのであつた。

ベルリンにいる間、秀麿が学者の噂うわさをしてよこした中に、エエリヒ・シユミツトの文才や弁説も度々褒ほめてあつたが、それよりも神学者アドルフ・ハルナツクの事業や勢力がどんなものだと云うことを、繰り返してお父うさんに書いてよこしたのが、どうも特別な意味のある事らしく、帰つて顔を見て、土産話みやげばなしにするのが待ち遠いので、手紙でお父うさんに飲み込ませたいとでも云うような熱心が文章の間に見えていた。殊ことに大学の三百年祭の事を知らせてよこした時なんぞは、秀麿はハルナツクをこの目覚ましい祭の中心人物として書いて、ウイルヘルム第二世とハルナツク

との君臣の間柄は、人主が学者を信用し、学者が献身的態度を以て学术界に貢献しながら、同時に君国の用をなすと云う方面から見ると、模範的だと云つて、ハルナツクが事業の根柢こんていをはつきりさせるために、とうとう父テオドジウスの事にまで溯さかのほつて、精しく新教神学発展の跡を辿たどつて述べていた。自分の専門だと云つている歴史の事に就いても、こんなに力を入れて書いてよこしたことはないのに、どうしてハルナツクの事ばかりを、特別に言つてよこすのだろうと子爵は不審に思つて、この手紙だけ念を入れて、度々読み返して見た。そしてその手紙の要点を掴つかまえようと努力した。手紙の内容を約つづめて見れば、こうである。政治は多数を相手にした為事しごとである。それだから政治をするには、今でも多

数を動かしている宗教に重きを置かなくてはならない。ドイツは内治の上では、全く宗教を異ことにしている北と南とを擣つきくるめて、人心の帰嚮きこうを繰あやつつて行かなくてはならないし、外交の上でも、いかに勢力を失墜しているとは云え、まだ深い根柢こんていを持っている口オマ法王を計算の外に置くことは出来ない。それだからドイツの政治は、旧教の南ドイツを逆さかわらないように抑おさえていて、北ドイツの新教の精神で、文化の進歩を謀はかつて行かなくてはならない。それには君主が宗教上の、しっかりした基礎きそを持っていないなくてはならない。その基礎が新教神学しんきょうしんがくに置いてある。その新教神学を現に代表している学者はハルナツクである。そう云う意味のある地位に置かれたハルナツクが、少しでも政治の都合の好いように、神

学上の意見を曲げているかと云うに、そんな事はしていない。君主もそんな事をさせようとはしていない。そこにドイツの強みがある。それでドイツは世界に羽をのして、息張いばつていることが出来る。それで今のような、社会民政党の跋扈ぼっこしている時代になつても、ウイルヘルム第二世は護衛兵も連れずに、侍従武官と自動車に相乗をして、ぷつぷと喇叭らっぱを吹かせてベルリン中を駈け歩いて、出し抜に展覧会を見物しに行つたり、店へ買物をしに行つたりすることが出来るのである。ロシアとでも比べて見るが好い。グレシア正教の寺院を沈滞のままに委まかせて、上辺うわべを真綿にくるむようにして、そつとして置いて、黔首けんしゅを愚ぐにするとでも云いたい政治をしている。その愚にせられた黔首が少しでも目を醒さます

と、極端な無政府主義者になる。だからツアアルは平服を著^きた警察官が垣を結つたように立つてゐる間でなくては歩かれないのである。一体宗教を信ずるには神学はいらない。ドイツでも、神学を修めるのは、牧師になる為めで、ちよつと思つと、宗教界に籍を置かないものには神学は不用なように見える。しかし学問などをしない、智力の発展してゐない多数に不用なのである。学問をしたものには、それが有用になつて来る。原^{がんらい}来^{すなわ}学問をしたものには、宗教家の謂^いう「信仰」は無い。そう云う人、即ち教育があつて、信仰のない人に、単に神を尊敬しろ、福^{ふくいん}音を尊敬しろと云つても、それは出来ない。そこで信仰しないと同時に、宗教の必要をも認めなくなる。そう云う人は危険思想家である。中には

実際は危険思想家になつていながら、信仰のないのに信仰のある真似をしたり、宗教の必要を認めないのに、認めている真似をしている。実際この真似をしている人は随分多い。そこでドイツの新教神学のような、教義や寺院の歴史をしつかり調べたものが出て来ていると、教育のあるものは、志さえあれば、専門家の綺麗に洗い上げた、滓かすのこびり付いていない教義をも覗のぞいて見ることが出来る。それを覗いて見ると、信仰はしなないまでも、宗教の必要だけは認めるようになる。そこで穏健な思想家が出来る。ドイツにはこう云う立脚地を有している人の数がなかなか多い。ドイツの強みが神学に基づいていると云うのは、ここにある。秀磨はこう云う意味で、ハルナツクの人物を称しょうさん讚さんしている。子爵にも

手紙の趣意はおおよそ呑み込めた。

西洋事情や輿地誌略よちしりやくの盛んに行われていた時代の人となつて、

翻訳書で当用を弁ずることが出来、華族仲間で口が利かれる程度

に、自分を養成しただけの子爵は、精神上の事には、朱子の註しゆしちゆうに

拠よつて論語を講釈するのを聞いたより外、なんの智識もないのだ

が、頭の好い人なので、これを読んだ後に内々ないない自ら省かえりみて見た。

倅せがれの手紙にある宗教と云うのはクリスト教で、神と云うのはクリ

スト教の神である。そんな物は自分とは全く没交渉である。自分

の家には昔から菩提所ぼだいしよに定さだまっている寺があつた。それを維新

の時、先代が殆ど縁を切つたようにして、家の葬祭を神官に任せ

てしまった。それからは仏と云うものとも、全く没交渉になつて、

今は祖先の神霊と云うものより外、認めていない。現に邸内ていないにも祖先を祭った神社だけはあつて、鄭ていちよう重ちゆうな祭をしている。ところが、その祖先の神霊が存在していると、自分は信じているだろうか。祭をする度に、祭るに在いますが如くすと云う論語の句が頭に浮ぶ。しかしそれは祖先が存在していられるように思つて、お祭をしなくてはならないと云う意味で、自分を顧みて見るに、實際存在していられると思うのではないらしい。いられるように思うのでもないかも知れない。いられるように思おうと努力するに過ぎない位ではあるまいか。そうして見ると、倅いの謂いう、信仰がなくて、宗教の必要だけを認めると云う人の部類に、自分は這入つてゐるものと見える。いやいや。そうではない。倅の謂いうのは、

神学でも覗いて見て、これだけの教義は、信仰しないまでも、必要を認めなくてはならぬと、理性で判断した上で認めることである。自分は神道の書物などを覗いて見たことはない。又自分の覗いて見られるような書物があるか、どうだか、それさえ知らずにいる。そんならと云つて、教育のない、信仰のある人が、直覺的に神靈の存在を信じて、その間になんの疑をも挿さままないのとも違ちがうから、自分の祭をしているのは形式だけで、内容がない。よしや、在いますが如く思おうと努力していても、それは空虚な努力である。いやいや。空虚な努力と云うものはありようがない。そんな事は不可能である。そうして見ると、教育のない人の信仰が遺伝して、微かすかに残っているとも思わなくてはなるまい。しかしこ

それは倅の考えるように、教育が信仰を破壊すると云うことを認め
た上の話である。果してそうであろうか。どうもそうかも知れな
い。今の教育を受けて神話と歴史とを一つにして考えていること
は出来まい。世界がどうして出来て、どうして発展したか、人類
がどうして出来て、どうして発展したかと云うことを、学問に手
を出せば、どんな浅い学問の為方しかたをしても、何かの端々はしはしで考え
させられる。そしてその考える事は、神話を事実として見させて
は置かない。神話と歴史とをはつきり考え分けると同時に、先祖
その外ほかの神霊の存在は疑問になつて来るのである。そうなつた前
途には恐ろしい危険が横わつてよこたいはすまいか。一体世間の人はこ
んな問題をどう考えているだろう。昔の人が真実だと思つていた、

神靈の存在を、今の人が嘘だと思つてゐるのを、世間人は当り前だとして、平氣でゐるのではあるまいか。したが随つてあらゆる祭やなんぞが皆内容のない形式になつてしまつてゐるのも、同じく当り前だとしてゐるのではあるまいか。又子供に神話を歴史として教えるのも、同じく当り前だとしてゐるのではあるまいか。そして誰たれも誰も、自分は神話と歴史とをはつきり別にして考えていながら、それをわざと擣つき交ませて子供に教えて、怪まずにゐるのではあるまいか。自分は神靈の存在なんぞは少しも信仰せず、唯俗に従つて聊いささか復か爾またり位の考ことで糊塗こして遣やつていて、その風俗、即ち昔神靈の存在を信じた世に出来て、今神靈の存在を信ぜない世に残つてゐる風俗が、いつまで現状を維持してゐようが、

いつになったら滅亡してしまおうが、そんな事には頓とんちやく著やくしな
いのであるまいか。自分が信ぜない事を、信じているらしく行
つて、虚偽だと思つて疚やましがりもせず、それを子供に教えて、子
供の心理状態がどうなろうと云うことさえ考えてもみないので
あるまいか。倅は信仰はなくても、宗教の必要を認めると云うこ
とを言っている。その必要を認めなくてはならないと云うこと、
その必要を認める必要を、世間の人は思つても見ないから、どう
したら神話を歴史だと思わず、神霊の存在を信ぜずに、宗教の必
要が現在に於おいて認めていられるか、未来に於いて認めて行かれ
るかと云うことなんぞを思つて見ようもなく、一切無頓著でいる
のではあるまいか。どうも世間の教育を受けた人の多数は、こん

な物ではないかと推察せられる。無論この多数の外に立つて、現今の頹勢たいせいを挽回ばんかいしようとしている人はある。そう云う人は、倅の謂う、単に神を信仰しろ、福音を信仰しろと云う類たぐいである。又それに雷同している人はある。それは倅の謂う、真似をしている人である。これが頼みになろうか。更に反対の方面を見ると、信仰もなくしてしまい、宗教の必要をも認めなくなってしまう、それを正直に告白している人のあることも、或る種類の人の言論ちようごんに徴して知ることが出来る。倅はそう云う人は危険思想家だと云っているが、危険思想家を嗅かぎ出すことに骨を折っている人も、こつちでは存外そこまでは気が附いていないらしい。実際こつちでは、治安妨害とか、風俗壊乱とか云う名目みょうもくの下もとに、そんな

人を羅致した実例を見たことがない。しかしこう云うことを洗^{あら}立^{だて}をして見た所が、確^{しか}とした結果を得ることはむずかしくはあるまいか。それは人間の力の及ばぬ事ではあるまいか。若^もしそうだと、その洗立をするのが、世間の無頓著よりは危険ではあるまいか。倅もその危険な事に頭を衝^つつ込んでいるのではあるまいか。倅は専門の学問をしているうちに、ふとそう云う問題に触れて、自分も不安になったので、己に手紙をよこしたかも知れぬ。それともこの問題にひどく重きを置いているのだろうか。

五条子爵は秀麿の手紙を読んでから、自己を反省したり、世間を見渡したりして、ざっとこれだけの事を考えた。しかしそれに就いて倅と往復を重ねた所で、自分の満足するだけの解決が出来

そうにもなく、倅の帰って来る時期も近づいているので、それまで待っても好いと思つて、返信は別に宗教問題なんぞに立ち入らずに、只委細承知した、どうぞなるべく穏健な思想を養つて、国家の用に立つ人物になつて帰つてくれとしか云つて遣らなかつた。そこで秀麿の方でも、お父うさんにどれだけ自分の言つた事が分かつたか知らずにいた。

秀麿は平生丁度その時思つている事を、人に話して見たり、手紙で言つて遣つて見たりするが、それをその人に是非十分飲み込ませようともせず、人を自説に転ぜさせよう、服させようともしない。それよりは話す間、手紙を書く間に、自分で自分の思想をはつきりさせて見て、そこに満足を感じる。そして自分の思想は、

又新しい刺戟しげきを受けて、別な方面へ移って行く。だからあの時子爵が精しい返事を遣ったところで、秀磨はもう同じ問題の上で、お父うさんの満足するような事を言つてはよこさなかつたかも知れない。

洋行をさせる時健康を氣遣つた秀磨が、旅に出ると元氣になつたらしく、筆まめに書いてよこす手紙にも生々した様子が見え、ドイツで秀磨と親しくしたと云つて、帰つてから尋ねて来る同族の人も、秀磨は随分勉強をしているが、玉も衝けば氷こおりすべ滑りも

すると云う風で、上流の人を相手にして開いている、某夫人のパンジオナアトでは、若い男女の寄宿人が、芝居の初興行をでも見に行くとき、ヴィコント五条が一しよでなくては面白くないと云う程だと話して聞せるので、子爵夫婦は喜んで、早く丈夫な男になつて帰つて来るのを見たいと思つていた。

秀麿は去年の暮に、書物をむやみに沢山持つて、歸つて来た。洋行前にはまだどこやら少年らしい所があつたのが、三年の間ですつかり男らしくなつて、血色も好くなり、肉も少し附いている。しかし待ち構えていた奥さんが氣を付けて様子を見ると、どうも物の言振いいぶりが面白くないように思われた。それは大学を卒業した頃から、西洋へ立つ時までの、何か物を案じていて、好い加減に

人に応対していると云うような、沈黙勝な会話振が、定めてすっかり直つて歸つたことと思つていたのに、歸つた今もやはり立つ前と同じように思われたのである。

新橋へ著ついた日の事であつた。出迎をした親類や心安い人の中うちには、邸まで附いて来たのもあつて、五条家ではそう云う人達に、一寸ちよつとした肴さかなで酒を出した。それが濟んだ跡で、子爵と秀麿との間に、こんな対話があつた。

子爵は袴はかまを着けて据わつて、刻煙草きざみたばこを煙管きせるで飲んでいたが、瘦やせた顔の目の縁しわに、皺しわを沢山寄せて、嬉しげに息子をじつと見て、只一言「どうだ」と云つた。

「はい」と父の顔を見返ししながら秀麿は云つたが、傍そばで見ている

奥さんには、その立派な洋服姿が、どうも先つき客の前で勤めていた時と変らないように、少しも寛いだ様子がないように思われて、それが氣に掛かった。

子爵は息子がまだ何か云うだろうと思つて、暫く黙つていたが、それきりなんとも云わないので、詞を續いだ。「書物を沢山持つて歸つたそうだね。」

「こつちで為事をするのに差支えないようにと思つて、中には読んで見る方の本でない、物を捜し出す方の本も買つて歸つたものですから、嵩が大きくなりました。」

「ふん。早く為事に掛かりたかろうなあ。」

秀麿は少し返事に躊躇するらしく見えた。「それは舟の中

でも色々考えてみましたが、どうも当分手が著けられそうもないのです。」こう云つて、何か考えるような顔をしている。

「急ぐ事はない。お前のは売らなくてはならんと云うのでもなし、学位が欲しいと云うのでもないからな。」いったん「一旦こうは云つたが、子爵は更に、「学位は貰つても悪くはないが」と言い足して笑つた。

ここまで傍聴していた奥さんが、待ち兼ねたように、いろいろな話をし掛けると、秀磨は優しく受答をしていた。この時奥さんは、どうも秀磨の話は気乗がしてない、つきあい「附合に物を言っているようだ」と云う第一印象を受けたのであつた。

それで秀磨が座を立った跡で、奥さんが子爵に言った。「体は

大層好くなりましたが、なんだかこう控え目に、考え考え物を言うようではございませんか。」

「それは大人おとなになつたからだ。男と云うものは、奥さんのように口から出任せに物を言つてはいけないのだ。」

「まあ。」奥さんは目を睜みはつた。四十代が半分過ぎているのに、まだぱつちりした、可哀かわいらしい目をしている女である。

「おこつてはいけない。」

「おこりなんかしませんわ。」と云つて、奥さんはちよいと笑つたが、秀麿の返事より、この笑の方が附合らしかった。

その時からもう一年近く立っている。久し振の新年も迎えた。

秀麿は位階があるので、お父う様程忙しくはないが、幾分か儀式らしい事もしなくてはならない。新調させた礼服を着て、不精らしい顔をせずに、それを済ませた。「西洋のお正月はどんなだったえ」とお母あ様が問うと、秀麿は愛想好く笑う。「一向駄目です。学生は料理屋へ大晦日おおみそかの晩から行って、ボオレと云って、シヤンパンに葡萄酒ぶどうしゆに砂糖に炭酸水と云うように、いろいろ交せて温めて、レモンを輪切にして入れた酒を拵こしらえて夜なかになるのを待っています。そして十二時の時計が鳴り始めると同時に、さあ新年だと云うので、その酒を注ついだ杯さかずきをてんでん

に持つて、こつこつ打ち付けて、プロジツト・ノイヤアルと大声で呼んで飲むのです。それからふぎけながら町を歩いて帰ると、元日には寝ていて、午ひるまで起きはしません。町でも家は大抵戸を締めて、ひっそりしています。まあ、クリスマスにお祭らしい事はしてしまつて、新年の方はお留守になつていゝようなわけだと云う。「でもお上かみのお儀式はあるだろうね。」「それはごきいますそうです。拝賀が午後二時だとか云うことでした。」こんな風に、何事につけても人が問えば、ヨオロッパの話もするが、自分から進んで話すことはない。

二三月の一番寒い頃も過ぎた。お母あ様が「向うはこんな事ではあるまいね」と尋ねて見た。「それはグラツトアイスと云つて、

寒い盛りちよつとに一ちよつと寸温かい晩があつて、積つた雪が上うわどけ融とけをして、それが朝氷あさこつていることがあります。木の枝は硝子ガラスで包んだようになつています。ベルリンのウンテル・デン・リンデンと云う大通りの人道が、少し凸でこぼこ凹のある鏡のようになつていて、滑つて歩くことが出来ないので、人足すなが沙すなを入れた籠かごを腋わきに抱かかえて、蒔まいて歩いていきます。そう云う時が一番寒いのですが、それでも口シアのように、町を歩いていて鼻が腐くるような事はありません。煖炉のない家もないし、毛皮を著かない人もない位ですから、寒さが体には徹こたえません。こちらでは夏座敷に住んで、夏の支度をして、寒がつているようなものですね。」秀麿はこんな話をした。

桜の咲く春も過ぎた。お母あ様に桜の事を問われて、秀麿は云

った。「ドイツのような寒い国では、春が一どきに来て、どの花も一しよに咲きます。美しい五月と云う詞があります。桜の花もないことはありませんが、あつちの人は桜と云う木は桜ん坊のなる木だとばかり思っていますから、花見はいたしません。ベルリンから半道はんみちばかりの、ストララウと云う村に、スプレエ川の岸で、桜の沢山植えてある所があります。そこへ日本から行っている学生が揃そろって、花見に行つたことがありますよ。絨じゆうたん 緞たんを織る工場の女工なんぞが通り掛かつて、あの人達は木の下で何をしているのだろうと云つて、驚いて見ていました。」

暑い夏も過ぎた。秀磨はお母あ様に、「ベルリンではこんな日にどうしているの」と問われて、暫く頭を傾けていたが、とうと

う笑いながら、こう云つた。「一番つまらない季節ですね。誰も彼も旅行してしまいます。若い娘なんぞがスウィツツルに行つて、高い山に登ります。跡に残っている人は為方しかたがないので、公園内の飲食店で催す演奏会へでも往いつて、夜なかまで涼みます。だいで北極が近くなっている国ですから、そんなにして遊んで帰つて、夜なかを過ぎて寝ようとする、もう窓が明るくなり掛かっています。」

かれこれするうちに秋になつた。「ヨオロツパでは寒さが早く来ますから、こんな秋あき日び和よりの味は味うことが出来ませんね」と、秀麿は云つて、お母あ様に対して、ちよつと愉快げな笑顔をして見せる。大抵こんな話をするのは食事の時位で、その外の時間に

は、秀麿は自分の居間になつてゐる洋室に籠こもつてゐる。西洋から持つて来た書物が多いので、本箱なんぞでは間に合わなくなつて、この一間だけ壁ことごとたなに悉く棚を取り付けさせて、それへ一ぱい書物を詰め込んだ。棚の前には薄い緑色の幕を引かせたので、一種の装飾にはなつたが、壁がこれまでの倍以上の厚さになつたと同じわけだから、室内が余程暗くなつて、それと同時に、一間が外より物音の聞えない、しんとした所になつてしまつた。小春の空が快く晴れて、誰も彼も出歩く頃になつても、秀麿はこのしんとした所に籠こもつて、卓テエブルの傍を離れずに本を読んでいる。窓の明りが左手から斜ななめに差し込んで、緑の羅紗らしやの張つてある上を半分明るくしている卓である。

この秋は暖い暖いと云っているうちに、稀まれに降る雨がいつか時し雨ぐれめいて来て、もう二三日前から、秀麿の部屋のフウベン形の瓦ガ斯ス煖だん炉ろにも、小間使の雪が来て点火することになっている。

朝起きて、庭の方へ築つき出してある小さいヴェランダへ出て見ると、庭には一面に、大きい黄いろい梧桐ごとうの葉と、小さい赤い山もみじの葉とが散らばって、ヴェランダから庭へ降りる石段の上まで、殆ど隙間もなく彩いろどっている。石垣いしぐはに沿うて、露ぬに濡れた、老ろうりよく緑ろくの広葉を茂らせている八角やっ全盛でが、所々に白い茎を、枝

のある 燭しよくだい 台たい のように抽ぬき出して、白い花を咲かせている上に、薄曇うすづめの空から日光が少し漏れて、雀すずめが二三羽鳴きながら飛び交わしている。

秀磨は暫く眺めていて、両手を力なく垂れたままで、背を反そらせて伸びをして、深い息を衝いた。それから部屋に這はい入って、洗面卓たくの傍そばへ行つて、雪が取つて置いた湯を使って、背広の服を引っ掛けた。洋行して帰ってからは、いつも洋服を著きているのである。

そこへお母あ様が這入つて来た。「きようは日曜だから、お父様は少しゆつくりしていらつしやるのだが、わたしはもう御飯いただを戴くから、お前もおいででないか。」こう云つて、息子の顔を

横から覗く^{のぞ}くように見て、詞を続けた。「ゆうべも大層遅くまで起きていましたね。いつも同じ事を言うようですが、西洋から帰ってお出^{いで}の時は、あんなに体が好かつたのに、余り勉強ばかりして、段々顔色を悪くしておしまいなのね。」

「なに。体はどうもありません。外へ出ないでいるから、日に焼けないのでしよう。」笑いながら云つて、一しよに洋室を出た。

しかし奥さんにはその笑声が胸を刺すように感ぜられた。秀磨が心からでなく、人に目潰^{めつぶ}しに何か投げ附けるように笑声をあびせ掛ける習癖を、自分も意識せずに、いつの間にか養成しているのを、奥さんは本能的に知っているのである。

食事をしまつて帰つた時は、明方に薄曇のしていた空がすつか

り晴れて、日光が色々に邪魔をする物のある秀麿の室を、物見高
 い心から、依怙えこじ地に覗こうとするように、窓帷まどかけのへりや書棚の
 ふちを彩つて、卓テの上エに幅の広い、明るい帯をなして、インク壺つぼ
 を光らせたり、床に敷いてある絨じゅうたん氈たんの空想的な花模様せに、
 那つなの性命を与えたりしている。そんな風に、日光の差し込んでい
 る処ところの空気は、黄いろに染まり掛かった青葉のような色をして、
 その中には細かい塵ちりが躍っている。

室内の温度の余り高いのを喜ばない秀麿は、煖炉のコックを三
 分一程閉じて、葉巻くわを銜くわえて、運動椅子に身を投げ掛けた。

秀麿の心理状態を簡単に説明すれば、無聊ぶりように苦んでいると云
 うより外はない。それも何事もすることの出来ない、低い刺戟に

饑えてゐる人の感ずる退屈とは違ふ。内に眠つてゐる事業に圧迫せられるような心持である。潜勢力の苦痛である。三国時代の英雄は髀ひに肉を生じたのを見て歎たんじた。それと同じように、余所目よそめには瘦せて血色の悪い秀磨が、自己の力を知覚してゐて、脳髓が医者いの謂いう無動作性萎縮いしゆくに陥おちいらねば好いかと憂うれへてゐる。そして思量の体操をする積りで、哲学の本なんぞを読み耽ふけつてゐるのである。お母あ様程には、秀磨の健康状態に就いて悲觀してゐない父の子爵が、いつだったか食事の時息子を顧みて、「一肚皮いちとひ時宜じぎに合あわらずかな」と云つて、意味ありげに笑つた。秀磨は例の笑を顔に湛たえて、「僕は不平家ではありません」と答えた。どうもお父う様はこつちが極端な自由思想をでも持つていはしないか

と疑っているらしい。それは誤解である。しかしさすが男親だけにお母あ様よりは、切実に少くもこっちの心理状態の一面を解していてくれるようだ、秀麿は思った。

秀麿は父の詞を一つ思い出したのが機縁になって、今一つの父の詞を思い出した。それは又或る日食事をしている時の事で「どうも人間が猿から出来たなんぞと思っていられては困るからな」と云った。秀麿はぎくりとした。秀麿だって、ヘツケルのアントロポゲニイに連署して、それを自分の告白にしても好いとは思っていない。しかしお父う様のこの詞の奥には、こっちの思想と相容れない何物かが潜んでいるらしい。まさかお父う様だって、草昧うまいの世に一国民の造った神話を、そのまま歴史だと信じてはい

られまいが、うかと神話が歴史でないと云うことを言明しては、人生の重大な物の一角が崩れ始めて、船底の穴から水の這入るよ
うに物質的思想が這入つて来て、船を沈没させずには置かないと
思つていられるのではあるまいか。そう思つて知らず識らず、頑
冥んめいな人物や、仮面かめんを被つた思想家と同じ穴に陥おちいつていられる
のではあるまいかと、秀麿は思つた。

こう思うので、秀麿は父の誤解を打ち破ろうとして進むことを
躊躇ちゆうじゆしている。秀麿が為めには、神話が歴史でないと云うことを
言明することは、良心の命ずるところである。それを言明しても、
果物が堅実な核さねを蔵かくしているように、神話の包くるみんでいる人生の重
要な物は、保護して行かれると思つている。彼を承認して置いて、

此これを維持して行くのが、学者の務つとめだと云うばかりではなく、人間の務だと思つている。

そこで秀麿は父と自分との間に、狭くて深い谷があるように感ずる。それと同時に、父が自分と話をする時、危険な物の這入つている疑のある箱の蓋ふたを、そつと開けて見ようとしては、その手を又引つ込めてしまうような態度に出るのを見て、齒痒はがゆいようにも思い、又気の毒だから、いたわつて、手を出させずに置かなくてはならないようにも思う。父が箱の蓋を取つて見て、白昼に鬼を見て、毒でもなんでもない物を毒だと思つて怖おそれるよりは、箱の内容を疑わせて置くのが、まだしもの事かと思う。

秀麿のこう思うのも無理は無い。明敏な父の子爵は秀麿がハル

ナツクの事を書いた手紙を見て、それに対する返信を控えて置いた後に、寝られぬ夜よなどには度々宗教問題を頭の中で繰り返し返して見た。そして思えば思う程、この問題は手の付けられぬものだと云う意見に傾いて、随したがつてそれに手を著けるのを危険だとみるようになった。そこでとにかくせがれ倅にそんな問題に深入をさせたくない。なろう事なら、倅の思想が他の方面に向くようにしたい。そう思うので、自分からは宗教問題の事などは決して言い出さない。そしてこの問題が倅の頭にどれだけの根を卸しているかとあやぶんで、窃ひそかに様子うかがを覗うようにしているのである。

秀麿と父との対話が、ヨオロッパから帰つて、もう一年にもなるのに、とかく対陣している両軍が、双方から斥せっこう候を出して、

その斥候が敵の影を認める度に、遠方から射撃して還かえるように、はかばかしい衝突もせぬ代りに、平和に打ち明けることもなく、いるのは、こう云うわけである。

秀磨の銜くわえている葉巻の白い灰が、だいぶ長くなつて持つていたのが、とうとう折れて、運動椅子に倚より掛かつている秀磨のチヨツキの上に、細い鱗うろこのような破片を留とめて、絨じゆうたん緞たんの上に落ちて碎けた。今のようになにもせずにいると、秀磨はいつも内には事業の圧迫と云うような物を受け、外には家庭の空氣の或る緊張を覚えて、不快である。

秀磨は「又本を読むかな」と思った。兼ねて生涯の事業にしよと企てた本国の歴史を書くことは、どうも神話と歴史との限界

をはつきりさせずには手が著けられない。寧ろ先ず神話の結成を学問上に綺麗に洗い上げて、それに伴う信仰を、教義史体にはつきり書き、その信仰を司祭的に取り扱った機関を寺院史体にはつきり書く方が好きそうだ。そうしたってプロテスタント教がその教義史と寺院史とで毀損せられないと同じ事で、祖先崇拜の教義や機関も、特にそのためだけに危害を受ける筈はずはない。これだけの事を完成するのは、極きわめて容易だと思つと、もうその平明な、小ざつぱりした記載を目の前に見るような気がする。それが済んだら、安心して歴史に取り掛られるだろう。しかしそれを敢あえてする事、その目に見えている物を手取る事を、どうしても周囲の事情が許しそうにないと云う認識は、ベルリンでそろそろ故郷へ帰る支

度に手を著け始めた頃から、段々に、或る液体の中に浮んだ一点の塵ちりを中心にして、結晶が出来て、それが大きくなるように、秀麿の意識の上に形づくられた。これが秀麿の脳髓の中に蟠はん結けつしている暗黒な塊で、秀麿の企てている事業は、この塊くわいに礙さまたげられて、どうしても発展させるわけにいかないのである。それで秀麿は製作的方面の脈管を総ふさて塞いで、思量の体操として本だけ読んでいる。本を読み出すと、秀麿は不思議に精神をそこに集注することが出来て、事業の圧迫を感じず、家庭の空気の緊張をも感ぜないでいる。それで本ばかり読んでいることになるのである。

「又本を読むかな」と秀麿は思った。そして運動椅子から身を起した。

丁度その時こつこつと戸を叩いて、秀麿の返事をするのを待つて、雪が這入つて来た。小さい顔に、くりくりした、漆のように黒い目を光らして、小さくて鋭く高い鼻が少し仰向あおもむいているのが、ひどく可哀らしい。秀麿が帰つた当座、雪はまだ西洋室で用をしたことがなかつたので、開けた戸を、内からしやがんで締めて、絨緞の上に手を衝いて物を言つた。秀麿は驚いて、笑顔をして西洋室での行儀を教えて遣つた。なんでも一度言つて聞せると、しつかり覚えて、その次の度たびからは慣れたもののようにするのである。

暖炉を背にして立つて、戸口を這入つた雪を見た秀麿の顔は晴やかになつた。エロチツクの方面の生活のまるでねむ瞑つている秀麿

が、平和ではあつても陰気なこの家で、心から爽快そうかいを覚えるのは、この小さい小間使を見る時ばかりだと云つても好い位である。

「綾小路あやこうじさんがいらつしやいました」と、雪は籠かごの中の小鳥が人を見るように、くりくりした目の瞳ひとみを秀麿の顔に向けて云つた。雪は若檀わかだんな那樣に物を言う機会が生ずる度に、胸の中で凱歌がいかの聲が起る程、無意味に、何の欲望もなく、秀麿を崇拜しているのである。

この時雪の締めて置いた戸を、廊下の方からあらあらしく開けて、茶の天鷲絨びろうどの服を着た、秀麿と同年代の男が、駆け込むように這入つて来て、いきなり雪の肩を、太った赤い手で押えた。

「おい、雪。若檀那の顔ばかり見ている、取次をするのを忘れて

は困るじやないか。」

雪の顔は真つ赤になった。そして逃げるように、黙つて部屋を出て行つた。綾小路の方は振り返つてもみなかったのである。

秀磨の眉間みけんには、注意して見なくては見えない程の皺しわが寄つたが、それが又注意して見ても見えない程早く消えて、顔の表情は極真面目ごくまじめになつている。「君つまらない笑じょうだん談は、僕の所でだけはよしてくれ給え。」

「劈頭へきとう第一に小言を食わせるなんぞは驚いたね。気持の好い天氣だぜ。君の内の親玉なんぞは、秋しゅうせい晴とかなんとか云うのだらう。尤ももつとセゾンはもう冬かも知れないが、過渡時代には、冬の日になつたり、秋の日になつたりするのだ。きようはまだ秋だと

して置くね。どこか底の方に、ぴりつとした冬の分子が潜んでいて、夕日が沈み掛かって、かっと照るような、悲哀を帯びて爽快な処がある。まあ、年増としまの美人のようなものだね。こんな日に鼯もぐらもち鼠ねずみのようになって、内に引っ込んで、本を読んでいるのは、世界は広いが、先ず君位なものだろう。それでも机の上に俯ふさつていなかっただけを、僕は褒ほめて置くね。」

秀磨は真面目ではあるが、厭いやがりもしないらしい顔をして、盛んに饒舌しゃべり立てている綾小路の様子を見ている。簡単に言えば、この男には餓鬼がき大将と云う表情がある。額ひたいぎわ際ぎわから顛うちよう頂ちようへ掛けて、少し長めに刈った髪を真っ直に背後うしろへ向けて搔かき上げたのが、日本画にかく野猪いのししの毛のように逆立っている。細い目のち

よいと下がった目尻めじりに、嘲ちやう笑しやう的な微笑を湛えて、幅広く広げ
た口を囲むように、左右の頬に大きい括弧かっこに似た、深い皺を寄せ
ている。

綾小路はまだ饒舌る。「そんなに僕の顔ばかり見給うな。心中
大いに僕を軽侮しているのだろう。好いじゃないか。君が口アで、
僕がブツフォンか。ドイツ語でホオフナルと云うのだ。陛下の倡し
優ようを以て遇する所か。」

秀磨は覚えず嘖き出した。「僕がそんな侮辱的な考をするもの
か。」

「そんなら頭からけんつくなんぞを食わせないが好い。」

「うん。僕が悪かった。」秀磨は葉巻の箱の蓋を開けて勧めなが

ら、ひとりごと独語のようにつぶやいた。「僕は人の空想に毒を注ぎ込むように感じるものだから。」

「それがサンチマンタルなのだよ」と云いながら、綾小路は葉巻を取った。秀麿はマツチを摩すった。

「メルシイ」と云つて綾小路が吸い附けた。

「暖かい所が好かろう」と云つて、秀麿は椅子を一つ煖炉の前に押し遣った。

綾小路は椅背きはいに手を掛けたが、すぐに据わらずに、あたりを見廻して、卓テエプルの上にゆうべから開けたままになっている、厚い、仮か

綴りとしの洋書に目を着けた。傍かたわらには幅の広い籠へらのような形をした、鼈べっこう甲の紙切小刀が置いてある。「又何か大きな物にかじり

附いているね。」こう云つて秀麿の顔を見ながら、腰を卸した。

綾小路は学習院を秀麿と同期で通過した男である。秀麿は大学に行くのに、綾小路は画かきになると云つて、溜池ためいけの洋画研究所へ通い始めた。それから秀麿がまだ文科にいるうちに、綾小路は先へ洋行して、パリイにいた。秀麿がマルセイユから上陸して、ベルリンへ行く途中で、二三日パリイに滞在していた時には、親切に世話を焼いて、シャン・ゼリゼエの散歩やら、テアートル・フランセエとジムナズ・ドラマチツクとの芝居見物やら、時間

を吝おしまずに案内をして歩いて、ベルリンへ行つてから著きる服まで
誂あつらえさせてくれた。

綾小路は目と耳とばかりで生活しているような男で、芸術をさ
え余り真面目には取り扱っていないが、明敏な頭脳がいつも何物
にか饑うえている。それで故郷へ帰つて以来引き籠り勝にしている
秀磨の方からは、尋ねても行かぬのに、折々遊びに来て、秀磨の
読んでいる本の話を、口ではちやかしながら、真面目に聞いて考
えても見るのである。

綾小路は卓の所へ歩いて行つて、開けてある本の表紙を引つ繰
り返して見た。「ジイ・フィロゾフィイ・デス・アルス・オツプ
か。妙な標題だなあ。」

そこへ雪がだえんけい楕円形のニツケル盆にこうちや香茶の道具を載せて持つて来た。そして小さい卓を煖炉の前へ運んで、その上に盆を置いて、綾小路の方を見ぬようにしてちよいと見て、そつと部屋を出て行つた。何か言われはしないだろうか。言えば又恥かしいような事を言うだろう。どんな事を言うだろう。言わせて聞いても見たいと云うような心持で雪はいたが、こん度は綾小路が黙つてた。

秀磨は伏せてあるタツスを起して茶を注いだ。そして「牛乳を入れるのだろうか」と云つて、綾小路を顧みた。

「こないだのように沢山入れないでくれ給え。一体アルス・オツプとはなんだい。」こう云いながら、綾小路は煖炉の前の椅子に

掛けた。

「コム・シイさ。かのようにとでも云つたら好いのだろう。妙な所を押さえて、考を押し広めて行つたものだが、不思議に僕の立場そのままを説明してくれるようで、愉快でたまらないから、とうとうゆうべは三時まで読んでいた。」

「三時まで。」綾小路は目を睜みはつた。「どうして、どこが君の立場そのままなのだ。」

「そう」と云つて、秀磨は暫く考えていた。千ペエジ近い本を六七分通り読んだのだから、どんな風に要点を撮つまんで話したものかと考えたのである。「先ず本当だと云う詞ことばからして考えて掛からなくてはならないね。裁判所で証拠立てをして拵こしらえた判決文を事

実だと云って、それを本当だとするのが、普通の意味の本当だろう。ところが、そう云う意味の事実と云うものは存在しない。事実だと云っても、人間の写象を通過した以上は、物質論者のランゲの謂う湊合そうごうが加わっている。意識せずに詩にしている。嘘になっっている。そこで今一つの意味の本当と云うものを立てなくてはならなくなる。小説は事実を本当とする意味に於おいては嘘だ。しかしこれは最初から事実がら^{うち}ないで、嘘と意識して作って、通用させている。そしてその中に性命がある。価値がある。尊い神話も同じように出来て、通用して来たのだが、あれは最初事実がただだけ違う。君のかく画も、どれ程写生したところで、実物ではない。嘘の積りでかいている。人生の性命あり、価値あるもの

は、皆この意識した嘘だ。第二の意味の本当はこれより外には求められない。こう云う風に本当を二つに見ることは、カントが元祖で、近頃プラグマチスムなんぞで、余程卑俗にして繰り返しているのも同じ事だ。これだけの事はちよつと一寸云つて置かなくては、話が出来ないのだがね。」

「宜よろしい。詞はどうでも好い。その位な事は僕にも分かっている。僕のかく画だつて、実物ではないが、今年も展覧会で一枚売れたから、慥たしかに多少の価値がある。だから僕の画を本当だとするには、異議はない。そこでコム・シイはどうなるのだ。」

「まあ待ち給え。そこで人間のあらゆる智識、あらゆる学問の根本を調べてみるのだね。一番正確だとしてある数学方面で、点だ

の線だのと云うものがある。どんなに細かくぽつんと打ったって点にはならない。どんなに細くすうつと引いたって線にはならない。どんなに好く削った板の縁ふちも線にはなっていない。角かども点にはなっていない。点と線は存在しない。例の意識した嘘だ。しかし点と線があるかのように考えなくては、幾何学は成り立たない。あるかのようにだね。コム・シイだね。自然科学はどうだ。物質と云うものだからが存在はしない。物質が元子から組み立てられていると云う。その元子も存在はしない。しかし物質があつて、元子から組み立ててあるかのように考えなくては、元子量の勘定が出来ないから、化学は成り立たない。精神学の方面はどうだ。自由だの、靈魂不滅だの、義務だのは存在しない。その無いもの

を有るかのように考えなくては、倫理は成り立たない。理想と云っているものはそれだ。法律の自由意志と云うものの存在しないのも、疾とづくに分かっている。しかし自由意志があるかのように考えなくては、刑法が全部無意味になる。どんな哲学者も、近世になつては大低世界を相待そうたいに見て、絶ぜつ待たいの存在しないことを認めてはいるが、それでも絶待があるかのように考えている。宗教でも、もうだいたい古くシユライエルマツヘルが神を父であるかのように考えると云っている。孔子こうしもずっと古く祭るに在いますが如くすと云っている。先祖の靈があるかのように祭るのだ。そうして見ると、人間の智識、学問はさて置き、宗教でもなんでも、その根本を調べて見ると、事実として証拠立てられない或る物を建こ

んりゆう

立よこたしている。即ちかのようにが土台に横わっているのだね。」

「まあ一寸待つてくれ給え。君は僕の事を饒舌しゃべる饒舌ると云うが、

君が饒舌り出して来ると、駆足になるから、附いて行かれない。

その、かのようにと云う怪物の正体も、少し見え掛つては来たが、

まあ、茶でももう一杯飲んで考えて見なくては、はつきりしない

ね。」

「もうぬるくなつただらう。」

「なに。好いよ。雪と云う、証拠立てられる事実が間へ這入はいつて

来ると、考えがこんがらかつて来るからね。そうすると、つまり

事実と事実がごろごろ転がつていてもしようがない。それを結び

附けて考えようとすると、厭いやでも或る物を土台にしなくてはなら

ない。その土台が例のかのようだと云うのだね。宜しい。ところが、僕はそんな怪物の事は考えずに置く。考えても言わずに置く。「綾小路は生なまぬる温い香茶をぐつと飲んで、決然と言い放った。秀磨は顔を蹙しかめた。「それは僕も言わずにいる。しかし君は画だけかいて、言わずにいられようが、僕は言うために学問をしたのだ。考えずには無論いられない。考えてそれを真直ぐに言わずにいるには、黙ってしまうか、別に嘘こしらを拵えて言わなくてはならない。それでは僕の立場がなくなってしまうのだ。」

「しかしね、君、その君が言うために学問したと云うのは、歴史を書くことだろう。僕が画をかくように、怪物が土台になついても好いから、構わずにずんずん書けば好いじゃないか。」

「そうはいかないよ。書き始めるには、どうしても神話を別にしないでならないのだ。別にすると、なぜ別にする、なぜごちゃごちゃにして置かないかと云う疑問が起る。どうしても歴史は、画のように一刹那を捉^{とら}えて遣っているわけにはいかないのだ。」

「それでは僕のかく画には怪物が隠れているから好い。君の書く歴史には怪物が現れて来るからいけないと云うのだね。」

「まあ、そうだ。」

「意気地がないねえ。現れたら、どうなるのだ。」

「危険思想だと云われる。それも世間がかれこれ云うだけなら、奮闘しよう。第一父が承知しないだろうと思うのだ。」

「いよいよ意気地がないねえ。そんな葛^{かっとう}藤なら、僕はもう疾^とつ

くに解決してしまっている。僕は画かきになる時、親爺おやじが見限つてしまつて、現に高等遊民として取扱つていなのだ。君は歴史家になると云うのをお父さんが喜んで承知した。そこで大学も卒業した。洋行も僕のように無理をしないで、気楽にした。君は今まで葛藤の繰延くりのべをしていたのだ。僕の五六年前に解決した事を、君は今解決して、好きなように歴史を書くが好いじゃないか。已やむを得んじやないか。」

「しかし僕はそんな葛藤を起さずに遣つていかれる筈だと思つてゐる。平和な解決がつい目の前に見えている。手に取られるように見えている。それを下手へたに手に取ろうとして失敗をすることなど、避けたいと思つてゐる。それでぐずぐずして、君に

まで意気地がないと云われるのだ。」秀麿は溜息ためいきを衝いた。

「ふん、どうしてお父うさんを納得させようと云うのだ。」

「僕の思想が危険思想でもなんでもないと云うことを言つて聞かせえすれば好いのだが。」

「どう言つて聞せるね。僕がお父うさんだと思つて、そこで一言つて見給え。」

「困るなあ」と云つて、秀麿は立つて、室内をあちこち歩き出した。

ひかげはもうヴェランダの檐のきを越して、屋根の上に移つてしまった。真まつ蒼さおに澄み切つた、まだ秋らしい空の色がヴェランダの硝子戸を青せいぎよく玉のように染めたのが、窓越しに少し翳かすんで見えている。

山の手の日曜日の寂しさが、だいぶ広いこの邸やしきの庭に、田舎の別荘めいた感じを与える。突然自動車が一台煉瓦れんが塀べいの外をけたたましく過ぎて、跡は又元の寂しさに戻った。

秀磨は語を続ついだ。「まあ、こうだ。君がさつきから怪物々々と云っている、その、かのようにだがね。あれは決して怪物ではない。かのようにがなくては、学問もなければ、芸術もない、宗教もない。人生のあらゆる価値のあるものは、かのようにを中心しんにしている。昔の人が人格のある単数の神や、複数の神の存在を信じて、その前に頭を屈かがめたように、僕はかのようにの前に敬けい虔けんに頭を屈める。その尊敬の情は熱烈ではないが、澄み切った、純潔な感情なのだ。道德だつてそうだ。義務が事実として証拠立

てられるものでないと云うことだけ分かつて、怪物扱い、幽霊扱いにするイブセンの芝居なんぞを見る度に、僕は憤懣ふんまんに堪えない。破壊は免るべからざる破壊かも知れない。しかしその跡には果してなんにもないのか。手に取られない、微かすかなような外観のものではあるが、底にはかのようにが儼げんこ乎として存立している。人間は飽くまでも義務があるかのように行わなくてはならない。僕はそう行って行く積りだ。人間が猿から出来たと云うのは、あれは事実問題で、事実として証明しようと掛かっているのだから、ヒポテジスであつて、かのようにではないが、進化の根本思想はやはりかのようにだ。生類は進化するかのようにはしか考えられない。僕は人間の前途に光明を見て進んで行く。祖先の霊があるか

のように背後うしろを顧みて、祖先崇拜をして、義務があるかのように、徳義の道を踏んで、前途に光明を見て進んで行く。そうして見れば、僕は事実上極ごく蒙昧もうまいな、極従順な、山の中の百姓と、なんのえら忤ぶ所もない。只頭がぼんやりしていないだけだ。極頑固な、極篤実な、敬神家や道学先生と、なんの忤ぶところもない。只頭がごつごつしていないだけだ。ねえ、君、この位安全な、危険でない思想はないじゃないか。神が事実でない。義務が事実でない。これはどうしても今日になって認めずにはいられないが、それを認めたとを手柄にして、神をけが洗す。義務をじゅうりん蹂躪する。そこに危険は始て生じる。行為は勿論もちろん、思想まで、そう云う危険な事は十分撲滅しようとするが好い。しかしそんな奴の出で来たのを

見て、天国を信ずる昔に戻そう、地球が動かずにいて、太陽が巡回していると思う昔に戻そうとしたって、それは不可能だ。そうするには大学も何も潰つぶしてしまつて、世間をくら闇にしなくてはならない。黔けんしゅ首を愚ぐにしないでならない。それは不可能だ。どうしても、かのようにを尊敬する、僕の立場より外に、立場はない。」

これまで例の口の端はたの括弧かっこを二重三重ふたえみえにして、妙な微笑を顔に湛たえて、葉卷けむりの烟を吹きながら聞いていた綾小路は、煙草の灰を灰皿に叩き落して、身を起しながら、「駄目だ」と、簡単に一言云つて、煖炉を背にして立った。そしてめまぐるしく歩き廻りながら饒舌じょうぜつしている秀磨を、冷やかに見ている。

秀磨は綾小路の正面に立ち止まって相手の顔を見詰めた。蒼い顔の目の縁がぼつと赤くなつて、その目の奥にはフアナチスムの火に似た、一種の光がある。「なぜ。なぜ駄目だ。」

「なぜつて知れているじやないか。人に君のような考になれと云つたつて、誰がなるものか。百姓はシの字を書いた三角の物を額へ当てて、先祖の幽霊が盆にのこのこ歩いて来ると思っている。

道学先生は義務の発電所のようなものが、天の上かどこかにあつて、自分の教おすわつた師匠がその電気を取りつついで、自分に掛けてくれて、そのお蔭かげで自分が生涯てごたえびりびりと動いているように思っている。みんな手てごたえ応のあるものを向うに見ているから、崇拜も出来れば、じゅんぼう 遵奉も出来るのだ。人に僕のかいた裸体画を一枚

遣つて、女房を持たずにいろ、けしからん所へ往かず^いにいろ、これを生きた女であるかのように思えと云つたつて、聴くものか。

君のかのようにはそれだ。」

「そんなら君はどうしている。幽霊がこのこ歩いて来ると思ふのか。電気を掛けられていると思ふのか。」

「そんな事はない。」

「そんならどう思う。」

「どうも思わずにいる。」

「思わずにいられるか。」

「そうさね。まるで思わない事もない。しかしなるたけ思わないようにしている。極^きめずに置く。画をかくには極めなくても好い

からね。」

「そんなら君が仮に僕の地位に立って、歴史を書かなくてはならないとなったら、どうする。」

「僕は歴史を書かなくてはならないような地位には立たない。御免を蒙る。」綾小路の顔からは微笑の影がいつか消えて、平気な、殆ど不愛想な表情になっている。

秀磨は気抜けがしたように、両手を力なく垂れて、こん度は自分が寂しく微笑んだ。「そうだね。てんでに自分の職業を遣って、そんな問題はそつとして置くのだろう。僕は職業の選びようが悪かった。ぼんやりして遣ったり、嘘を衝いてやれば造做はないが、正直に、真面目に遣ろうとすると、八方塞がりになる職業を、僕

は不幸にして選んだのだ。」

綾小路の目は一刹那せつな鋼鉄の様に光った。「八方塞がりになつたら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」

秀磨は又目の縁を赤くした。そして殆ど大人の前に出た子供のようこゝろな口吻ふんで、声低く云つた。「所詮しよせん父と妥協して遣る望はあるまいかね。」

「駄目、駄目」と綾小路は云つた。

綾小路は背をあぶるように、煖炉に太った体を近づけて、両手を腰のうしろに廻して、少し前屈みになつて立ち、秀磨はその二歩前に、瘦せた、しなやかな体を、まだこれから延びようとする今年竹ことしだけのように、真つ直にして立ち、二人は目と目を見合わ

せて、良久^やしく黙っている。山の手の日曜日の寂しさが、二人の
周囲を依然支配している。

青空文庫情報

底本：「阿部一族・舞姫」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年4月20日発行

1985（昭和60）年5月20日36刷改版

入力：高橋真也

校正：湯地光弘

1999年9月23日公開

2006年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

かのように

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>